

## ひとつの疑問

近年コレクションに加わった赤瀬川原平の作品の中にはハイレッド・センター（以下HRC）名義のイヴェントの記録や印刷物が含まれている。美術館やギャラリーを飛び出して、日常生活を「攪拌」する行為を展開したHRCの実践は、従来の「作品」概念を軽やかに乗り越えるものであり、一九六〇年代の前衛芸術の早すぎる到達点を示すものだった。このような社会的な領域に直接的に介入するHRCのイヴェントや行為が、これまで「直接行動」と呼ばれてきたことは周知のとおりである。一九八四年に刊行された赤瀬川原平による貴重な活動記録が『東京ミキサー計画…ハイレッド・センター直接行動の記録』と題されたことで、「直接行動」という美術界において耳慣れない言葉はHRCの専売特許のように浸透していくことになる。二〇一三年から二〇一四年にかけて名古屋美術館と渋谷区立松濤美術館で開催された展覧会も、「ハイレッド・センター…『直接行動』の軌跡」と題され、このキーワードを当然のように踏襲した。本論の目的は、これまでの「直接行動」という術語をあらためて問

い直すことにある。なぜ「直接行動」という政治学概念が、前衛芸術を語る上で選択されたのだろうかという素朴な疑問からはじめよう。この特殊な用語の出自と同時代における文脈、さらには事後的に戦後日本美術史が整備される過程で付与された意味を解きほぐすことが、HRC研究をもう一歩進めるためには不可欠だと思われるからだ。

## 「直接行動」の舞台

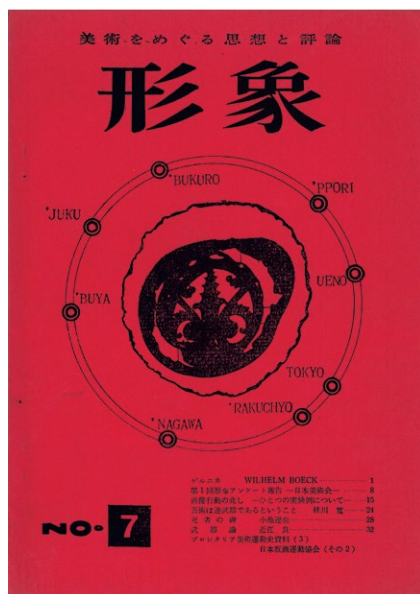
政治学用語としての「直接行動」とは、議会主義的方法によらずに政治的、経済的な目的の実現をはかる闘争方法であり、具体的にはボイコットやストライキなどの戦術を指す。美術とおよそ結びつきさうにないこの用語を、雑誌『形象』第七号（一九六四年二月）と第八号（一九六三年刊行月不明）に掲載されたHRC結成直前の高松次郎、中西夏之、赤瀬川原平が編集した座談会のタイトルに採用したのが、同誌の編集を担当した今泉省彦であった。題して「直接行動の兆」（第八号では「直接行動論の兆」）。話題の中心は高松と中西が実施した「山手線のフェスティバル」と赤瀬川が参加した「敗戦記念晩餐会」であった

が、座談会では「直接行動」という用語についての言及はない。その代わりに命名者である今泉自身の文章の中から彼の意図を推察することができる（長良棟名で執筆）。

「直接行動」という概念がはじめて提起された『形象』第七号の重要な主題のひとつは、反画壇の拠点であった無審査公募を旨とするアンデパンダン展が展示拒否という事態を招き、その存在意義を失ったことへの断罪であった。同号に長良棟名で寄せられたアピール「アンデパンダン展に喪章を送れ 又は君等、美術館から溢れ出よ」には、アンデパンダンの死が宣告されると同時に、「あえてこの温室を打ち割って、君等が美術館からあふれ出たとき、君等は反社会行動者として日本の美術運動に別の局面を与えるかもしれないのだ」という予言ともアジテーションともとれる一文が末尾に記されているのだ。この一文が今泉（長良）の想定する「直接行動」を意味していることは、第八号の長良による「直接行動

（論）の兆し」という文章が裏付けてくれる。ここでも論の核をなすのは、美術館側から「出品作品規格基準」が出されるにいたって末期的な症状を呈する読売アンデパンダン展への批判であった。このような事態に直面して、筆者は内側から美術館という制度を解体することを呼びかける。というのも、すでに美術館の空間を変容させるような作例が登場しているからだ。

長良は二つの傾向を挙げている。ひとつは、赤瀬川の「模造千円札」、中西の「洗濯ばさみ」、高松の「紐」のように観客の行為を誘発するプログラムが組み込まれ、作品世界が無秩序に拡散していくもの。もうひとつは、小杉武久と風倉匠のようにアンデ



雑誌『形象』第7号、1963年2月

パンダン展の背後に潜んでいた新聞社、美術館、警察という権力を逆なでし、それを発動させてしまうような挑発性を帯びた作品。これらを上述した第七号のアピールでも使用した「美術館をあふれ出る」実践と見なしたのだ。長良が「直接行動」という語に託したニュアンスと、その対象が一九六三年時点でのアンデパンダン展であつたことは明らかになつたのではないだろうか。

### 「直接行動」か「直接行動論」か

しかし、それでも「直接行動」という用語を美術の文脈に持ち込むことに飛躍があることは否めない。それは今泉（長良）独自の着想だつたのだろうか、それともアイディアの源泉があるのだろうか。

今泉はひとつの手掛かりを残してくれた。ハイレッド・センターについて一九七一年に書かれた文章である。ここで今泉は『形象』の特集ではついに行わなかつた「直接行動」の定義を試みている。

直接行動とはなにか、言う迄もなく、議会主義は革命運動を議席獲得闘争にすりかえ、階級闘争を屏息させ、永遠に革命を遷延し、かくして支配勢力を支える道具になるのだということを、早くも洞察した幸徳秋水が、革命運動は労働者のゼネラル・ストライキによって、

支配勢力を転覆せしめる方向に進められねばならないと考え、唱導したという、歴史的な重みを、この直接行動という言葉は荷なっているのである。

『美術手帖』一九六三年六月号にジャン・ジャック・ルベルが報告している種類のハプニングを直接行動というのではない。内閉した会場内での諸行動が、場外にあふれ出る衝撃力を持つにいたるためには、相互に許し合う仲間内の默契を捨てる必要がある（註1）。

「直接行動」と幸徳秋水の関係については後述するとして、まず唐突に言及されているジャン・ジャック・ルベルに注目したい。ルベルはフランスの詩人、評論家、画家。六〇年代初頭からハプニングを軸に据えて前衛芸術運動を推進している。

『美術手帖』誌で紹介されたのはルベルが主導し、工藤哲巳も参加した「カタストロフ精神鼓舞のための示威運動」という展覧会の模様であつた。今泉は「ジャン・ジャック・ルベルが報告している種類のハプニングを直接行動というのではない」と断言しているが、おそらく今泉はもうひとつのルベルの記事を意図的に伏せていると思われる。それは一九六三年二月八日の読売新聞夕刊に掲載された同展覧会（読売新聞紙上では「破局の精神」展と翻訳される）を紹介する「抵抗する芸術家」とい

う文章である。編集がつけた見出しは「因習破る直接行動」であつた。ルベルの文章のなかから「直接行動」に関する部分を引用しよう。

社会生活、性生活、宣伝攻勢に押しつぶされた人間の狂気、生活の画一化、道徳的貧困、ナシヨナリズム、迷信、核戦争の恐怖、つまり、われわれが個人として生きてゆくのをさまたげる一切の災厄に対し、この新しい芸術運動はかつてのダダイストや超現実主義者たちよりはるかに率直かつ激烈に立ち向かっている。この新傾向の特徴は直接行動にあり、また言葉やきれいなことの演説や飾りたてた展覧会、さらには現代芸術が経済的、精神的に社会に屈服する一因を作った、古きよき文化的慣習に対する不信にある（註2）。

ルベルは「直接行動」という用語を、芸術家が「伝統的で不的確な手段にたよらなくとも、全面的、直接的に自己表現しうる」、「あらゆる手段によって、人間の全身的な叫びを解放しようとする」ハプニングという表現形態に適用している。

今泉がこの記事を見た後に『形象』第七号を刊行した可能性があるかどうかであるが、同号の奥付によれば発行日は一九六三年二月一日となつているから、この日付

をそのまま信用すれば今泉の「直接行動」の使用例のほうがわずかに早かつたことになる。その前後関係はともかくとして、ほぼ同時期にイヴェントやハプニングなどの新しい芸術動向に対して「直接行動」という用語を使用したことは注目に値する。

興味深いのは、今泉がルベルとの差異をことさらに強調していることである。それが理由かどうかは不明であるが、『形象』第七号では「直接行動の兆し」と題された座談会が、不思議なことに、次号では同じ座談会の後半部分であるにもかかわらず「直接行動論の兆」に変更されているのである。これは誤植ではなく、意識的に「直接行動」から「直接行動論」へのわずかな、しかし重要な修正が加えられたとみて間違いない。そこにはどのような意図が潜んでいるのだろうか。推測にすぎないが、ここで幸徳秋水の「直接行動論」を召喚することで、ルベルの「直接行動」との差別化を図つたのではないだろうか。おそらく今泉の念頭には、一九六〇年十一月に現代思潮社から刊行された秋山清著『日本の反逆思想：アナキズムとテロルの系譜』があつただろう。同書は六十年安保を契機とするアナキズム思想の復権を提唱するものであつたが、秋山は第一章を「直接行動論と幸徳秋水」と題し、大逆事件のフレイムアップによって、暴力とテロの代名詞のように曲解されてきた幸徳の「直接

行動」の思想的な可能性を救い出そうとした。今泉は、日本のアナキズムの伝統と接合することで、欧米由来の「ハプニング」「直接行動」との差異化を図ったのだ。

## 日本におけるアナキズムの戦後史

こうして「直接行動」という用語は、幸徳秋水にまで遡るアナキズム思想の系譜に連なることになり、政治的、社会的、歴史的な含意をたつぷりと抱えることになる。だが一九六三年時点での日本社会におけるアナキズムの布置をおさえないと、この用語が当時発していたであろう鮮烈な響きを理解することは不可能である。六〇年代から七〇年代にかけてのアナキズムの復権と俗化の過程を、アナキスト江口幹は次のように詳細に教えてくれる。

敗戦後の日本において、アナキストであることは何よりもまず滑稽なことであつた。それはすでにマルクス主義によつて清算された、すでに歴史の進歩のなかで捨て去られた時代遅れな思想を奉ずることであり、…（中略）…その状況は、一般的にはほとんど一九六〇年代のなかばまでつづいた、とみてさしかえないと思われる。秋山清は、六〇年安保のデモの際、黒旗をかかげた集団に対して、日本にアナキストというものがいたのか、とものめずらしげに問いか

けてきた人びとのあつたことを、どこかに書いていたし、六五年秋の日韓条約反対デモでアナキスト数人が逮捕されたとき、それを報じたある新聞は「生きていたアナキスト」という見出しをつけていた…（中略）…しかし、ここ数年の間に事情はかなり変わった。先日ある若者向けの週刊誌が「アナキストってのは、カッコイイからねえ」と書いていたと聞いて苦笑させられたが、いくらか揶揄ぎみであるにしても、アナキストが世間的にまったく無視されていた存在ではなくなった、という経緯を端的に示しているように思われる。事実はむしろ、…（中略）…しだいに脚光を浴びつつあるといつていいのかもしれない。ブームとか流行とかいうほどではないにしても、関心が高まりつつあることは確かである。既存のアナキズム運動とは別に、特に学生運動のなかで、アナキズム的なグループは随所に生まれてきているし、アナキズムに関する出版点数の増加は、近年の目立つ傾向であり、アナキズムを特集する雑誌も決して少なくない昨今である〔註3〕。

江口のエッセーは、六〇年代後半の学生運動の昂揚を経てアナキズムの認識に大きな変化があつたことを伝えてくれる。とすると、先に引いた今泉のハイレッド・センター論と、その中で「直接行動」と

いうキーワードの再浮上は、七〇年前後のアナキズム思想の文化的領域への浸透を反映している可能性が高い。つまり「直接行動」という同じ用語が使用されているにしても、その語義は六三年の時点と七一年の時点では自ずと異なってくるということだ。たとえば、六三年の時点であれば強調されていたアンデパンダン展への対抗という目的が七一年の記述では薄まっているように、執筆時において事後的に整理された叙述として今泉の論を精読する必要がある。

それは現在の地点から過去の歴史を語る際に私たちが使用する語彙とも関わってくる問題だ。とくに「直接行動」のように、明確に定義されず、なおかつ実証的な

検証も経ていない特殊な用語を、たとえ当事者が使用しているからといって無批判に踏襲することは危険である。それが思想的なアナキズムという六〇年代を通して醸成された巨大な地層に届く魅力的な言葉であるがゆえに、なおさら今後の研究が待たれるのだ。（企画課主任研究員）

註

1 今泉省彦「ハイレッド・センターにふれて」『美術手帖』美術出版社、一九七二年十月、七七頁。  
2 ジャン・ジャック・ルベル「抵抗する芸術家」『読売新聞』、一九六三年二月八日、夕刊。

3 江口幹「アナキズム——アンチテーゼの思想」『経済評論』別冊「日本評論社」、一九七二年冬号、引用は大沢正道編『アナキズムと現代』三二書房、一九七五年、七〇―七二頁。

次号予告 2018年10月1日刊行予定

## 現代の眼 629

On view

日本・スウェーデン外交関係樹立150周年  
インゲヤード・ローマン展

2018年7月1日発行 現代の眼 628号

編集：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館

編集・制作：美術出版社 デザインセンター

発行：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館  
〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園 3-1  
電話 03(3214)2561

表紙：レストラン「フード」の前で、ゴードン・マッタ＝クラーク、  
キャロル・グッデン、ティナ・ジルアール（1971年）  
Photo: Richard Landry  
© The Estate of Gordon Matta-Clark  
Courtesy Richard Landry, The Estate of Gordon Matta-Clark  
and David Zwirner, New York/London/Hong Kong

MOMAT支援サークル

木下グループ LUXURY CARD.

三菱商事 DNP 大日本印刷 AVANT

鹿島建物 Marubeni パシフィックコンサルタンツ

JEOL 日本電子株式会社 SEIKO

ANA Inspiration of JAPAN | A STAR ALLIANCE MEMBER

MS&AD 三井住友海上